

日蓮にみる倫理思想

「倫理」について

哲学者岩崎武雄氏は、その著作『倫理学』の中で独自の倫理学論を展開している。岩崎氏の倫理学の考え方を箇条書きにしてみると次のようになる。^①

- ①倫理学の解くべき問題は、いかに行為すべきかということであり、どういう行為がよい行為かということである。
- ②倫理学はそれ自身において善なるものを考察するのではなく、行為の原理の善さを追求するものである。なぜならば、それ自身が善なるものは直接、行為とは無関係だからである。
- ③行為の原理は命令としての意味（規範的意味）を持ちうる。命令としての意味を持つ以上、超越的性格を持つ。
- ④超越的性格を持つ行為の原理に関して、その善さを判断するのは価値判断であり、価値判断は存在のあり方についての判断である存在判断（経験的事実についての記述的判断としての事実判断ばかりでなく、形而上学的存在についての判断をも含む）からは導けない。したがってこの場合、価値判断とは道德的原理について

三 輪 是 法

ての価値判断であり、具体的な行為や対象についての価値判断ではない。

⑤行為の原理は当為である。当為とは超越的な価値と存在との中間的性格を持つ。すなわち、道德的原理は超越的（すなわち、存在から導き得ないということ）であって存在と対立しつつ、存在と無関係に成立するものではない。

こうした考えの前提になるのが、人間は自由意志をもつ、すなわち自らの意志によつて自己の行為を決断し選ぶことができるということ、岩崎氏は人間が自由意志によつて自らの行為を選択していくことを必然とする立場をとっている。換言するならば、人間である限り、我々は自分自身の意志で自己行為を決定してゆかなければならない、ということである。その際に必要となるのが、倫理的反省に基づく行為の原理の価値判断であり、それにより我々は正しい行為とは何かを判別していくのである。

こうした思索に基づきながら、岩崎氏は倫理思想史上の

諸々の倫理を、理想主義的倫理学と現実主義的倫理学の二つに分類し、その倫理が不完全なものであったことを指摘する。⁽²⁾

理想主義的倫理学とは行為の原理としての道徳が持つ超越的性格を強調し、それ自身において善なるものを設定するというもので、したがって現実から超越することが善であると説く。例えばプラトンのイデア論であり、この立場は超越性を示すだけに止まっているため、存在との連関が考えられておらず、多くの場合が無内容で空虚になり、消極的な道徳規定になる。つまり、現実を超越した上で、(あるいは現実を超越する上で)積極的に何をなすべきかが示されていないのである。

一方、現実主義的倫理学は現実的存在によつて倫理を基礎づけようとするもので、先に④で示したように、存在判断から価値判断を導こうとする立場である。この場合存在判断から価値判断を導出する際に、一つの価値観を前提にしなければならず、結局アリストテレスの倫理学のように、理性のよるな超越的な価値的存在を前提にしなければならなくなる。こうして岩崎氏は、この二つの倫理学が行為の原理の善さではなく、それ自身において善なるものを追求してきたところにまず欠陥を認め、さらに、行為の原理というものが、超越的価値と現実的存在の中間に位置するものであることを指摘するのである。ではこの中間に位置する倫理を考察する倫理学の方法とはいかなるものであろうか。

現実主義的倫理学と理想主義的倫理学は、お互いの欠陥を補完しあう立場であり、それを要求している。氏はこの倫理想史を踏まえて、倫理的判断が下す真理とは何かを考察する。すなわち、二つの倫理学の陥穽は、実証主義が基づく実在と判断(判断の基準は「説明の成功」ということであり、それは「経験」を通して実在と結びつく)の一致という真理観にあり、真理に到達する方法として演繹的方法しか見いだせない。つまり、演繹的である以上、経験的判断を決定する高次の判断があるわけではなく、経験を通過して高次の判断を仮説として提示するしかないということである。経験より高次の判断が真であるかどうかは、我々が神的存在でない限り、認識不可能であつて、したがつて「実在と判断の一致」という真理観では真の真理に到達できない。

ここで氏が述べる倫理学の方法とは、高次の判断に到達するためには、幾度となく経験的事実について仮説を立て、試行錯誤を重ねていかなければならないというもので、これを「自覚の弁証法」と呼んでいる。そしてこの仮説の真偽を判断すること(倫理的判断)は、行為の原理の善さを判断することであり、行為を規制する命令である以上、判断基準は「人間は原理に則つた行為が可能か否か」ということになる。

こうして、様々な原理を、それを実践することで顕現する人間の本性に投げ入れてみるという方法によつて、我々は

誤った二つの倫理学の方法から脱却し、真なる倫理を導き出せるのである。岩崎氏がいう倫理とは人間が行為すべきことを決定するための原理であり、その原理の善さを決定するための弁証法的思索が倫理学ということである。では次に「仏教と倫理」という関係を考えてみたい。

二 仏教と倫理

仏教、殊に本稿のように日本仏教に倫理を見る場合、注意しなければならぬことは、宗教性の影響である。すなわち、日本仏教の倫理は、ジョン・ロールズ（一九二一〜）が批判する倫理の一つである「権威主義」の倫理に該当するということである。ロールズが言う「権威主義」とは、道徳原理を個人の信仰あるいは国家、政党、伝統、教会といった権威によって説くもので、倫理が聖域の言説として、批判・修正といった内省を持たないものになる、というものである³。また、岩崎氏の「存在判断は価値判断を導き出せない」という定理に即して考えると、「偉大なる積尊（あるいは阿弥陀仏などの諸仏諸菩薩）は存在する」という存在判断は善悪の価値判断を導き出さないとすることになる。すなわち、このテーゼから導出される価値判断は、それ自身において善なるものであつて、倫理的価値判断とはなり得ないということである。しかし、実際に仏教の依つて立つ立場は、「偉大なる積尊は存在

する」という存在判断から、仏教經典の神聖性が発生し、積尊の言説の絶対性が強調されることとなり、ロールズの言う「権威主義」となつてしまふ。したがつて、日本仏教（禪宗を除く）が説く倫理は、岩崎氏の言葉を借りると、その導出方法については現実主義的倫理学であり、内容については、超越した存在を善とする理想主義的倫理ということになり、完全な倫理を導き出すことは不可能であると言わざるを得ない。これは宗教全般に言えることで、最大の問題は、宗教の倫理が「信仰」を前提としている以上、人間の自由意志を損うおそれがあるということではないだろうか。

三 日蓮にみる倫理

では、日蓮の言説からは倫理は導けるであろうか。日蓮の教義の根幹は法華経であり、法華経如来寿命量で頭かにされる久遠実成の積尊である。そして実際に、法華経を解して仏について倫理的に評価を示す言説が『智慧亡国御書』に確認できる。

法華経の第一の巻の諸法実相乃至唯仏乃能究尽とかれて候はこれなり。本末究竟と申すは、本^ト者悪のね（根）善の根、末と申すは悪のをわり善の終^レぞかし。善悪の根本枝葉をさとり極めたるを仏とは申^スなり。

日蓮は法華経という存在判断を通し、善悪の判断を極めた

これは確かに現実主義的倫理学の方法であることは否めないが、試行錯誤の出発点であり、次第に真理へと向かっていく弁証法的な展開の発端とも言えるのではないだろうか。この「依法不依人」という言葉から導き出せる原理は、やはり人間の限界性・有限性であつて、上位概念の法に従うことが人間にとつて必修であることが示されていると理解できるのである。

四 小結

日蓮の倫理を、宗教倫理から切り離して考察してみた。その際に言えることは、日蓮が示す行為の原理は「生命を尊ばなければならぬ」ということで、このことを自覚していく弁証法的思索の中に、信仰へと到達する宗教倫理が成立していくということである。やがて永遠なる生命を持つ積尊を本尊とすることで、更に人間の有限性を説くに至り、高次の真理性へと向かうことになる。この生命に関する倫理は、我々人間にとつて至極当然の倫理であるが、これを基底にしない限り、現在倫理を語るときに問題となる、「功利主義」か「義務主義」かという選択について考察できないのではないだろうか。仏教、特に日本仏教から導出可能な倫理はその根本に、人間の生命や能力の限界を自覚するという内省があり、それに基づいて、自然界の中の人間、宇宙の中の人間の位置付けを謙虚に為し得ると思われる。

1 『岩崎武雄著作集』第六卷所収『倫理学』「第一章 倫理学の対象」、二四三〜二七〇頁。

2 右同書、「3 従来の倫理学の型とその誤り」二六七〜二七〇頁。

3 ロールズが従来の倫理を批判する際に用いるチームは「権威主義」と「実証主義」である。「権威主義」は文中で述べたとおりであり、他方「実証主義」は倫理規範は一定の情動の表現にすぎず、それは実証的に解明されるが、「権威主義」と異なり、規範を説得やプロパガンダといった技術で鑄造や変形することとしている。（川本隆史著『現代思想の冒険者たち23 ロールズ』講談社、五二頁。）あえて、岩崎氏が示す誤った倫理学に対応させるならば前者が理想主義的倫理学で、後者が現実主義的倫理学となるであろう。

4 『昭和定本日蓮聖人遺文』（以下『昭和定本』と略す）一一三〇頁。

5 『昭和定本』一五三五頁。

6 『昭和定本』三三三頁。

7 『昭和定本』四〇〇頁。

8 『昭和定本』一一九四頁

〈キーワード〉 日蓮、倫理、人間の有限性、生命

（身延山大学専任講師）